

〔調査報告〕

## アメリカの大学で学ぶ日本語学習者を理解するために —— サンディエゴ州立大学におけるアンケート調査結果から ——

渡部孝子・日暮嘉子

### 要 旨

サンディエゴ州立大学と群馬大学教育学部は1973年から交換留学制度を開始し、それ以降、約40年に渡る交流を継続させてきた。しかしながら、これまで受け入れ側の群馬大学におけるプログラムは必ずしも学生のレディネスやニーズを考慮したものを提供してきたわけではない。その要因の一つとして、アメリカの大学で学ぶ日本語学習に関する情報が十分に得られなかったことが挙げられる。そこでサンディエゴ州立大学と群馬大学の交換留学プログラムの担当者が共同で2011年3月にサンディエゴ州立大学日本語プログラムで学ぶ受講生に、第一言語、言語学習経歴、日本語学習の動機等に関するアンケート調査を実施した。調査結果から、調査対象者のほぼ3割が日本語以外に二つ以上の言語を学習していること、「道具的動機」と「好奇心や関心」が強い動機となっていることが明らかになった。

【キーワード】 日本語学習者 アメリカ人大学生 学習の動機

### 1. はじめに

サンディエゴ州立大学（以降、SDSU とする）と群馬大学教育学部と交流の歴史は1973年に始まった。1973年からこれまでの双方の交換留学生の数を表1に示す。表1から、交換留学制度とはいえ群馬大学からの送り出しと受け入れ学生数は均衡ではないことがわかる。これまで群馬大学から送り出した日本人学生数は64名であるのに対し、SDSU から受け入れた交換留学生数は22名であり、その割合はほぼ3：1となっている。実際に、群馬大学からの送り出しから始まり、交換留学制度開始12年目の1984年にして1名を受け入れることになった。国の留学生受け入れ政策と群馬大学の留学生受け入れ数の増加に伴い、群馬大学にも国際交流と日本語教育の拠点となる留学生センター（現国際教育研究センター）が1999年に設置された。これを機に日本語教育プログラムも整備され、協定校の数も交換留学生の数も増加している。一方、SDSU に関しては、2002年以降は受け入れ・送り出しの数も均衡が取れてきている。これは、SDSU の日本交流責任者の配慮が反映された結果である。

表1 サンディエゴ州立大学と群馬大学間の交換留学生の数

年	SDSU 派遣数	群大受け入れ数	合計	年	SDSU 派遣数	群大受け入れ数	合計
1973	2	0	2	1994	1	0	1
1974	2	0	2	1995	1	1	2
1975	2	0	2	1996	3	1	3
1976	2	0	2	1997	3	0	3
1977	2	0	2	1998	2	1	3
1978	2	0	2	1999	3	0	3
1979	2	0	2	2000	2	0	2
1980	2	0	2	2001	2	0	2
1981	2	0	2	2002	1	1	2
1982	2	0	2	2003	2	2	4
1983	1	0	1	2004	2	0	2
1984	1	2	3	2005	2	3	5
1985	1	0	1	2006	0	0	0
1986	1	1	2	2007	1	1	2
1987	1	0	1	2008	1	1	2
1988	1	0	1	2009	2	3	5
1989	1	0	1	2010	2	1	3
1990	1	2	3	2011	2	0	2
1991	1	0	1	2012	1	—	1
1992	1	2	3				
1993	1	1	2	合計	64	23	87

\*表1は2012年1月10日現在のデータに基づいたものである。

しかしながら、群馬大学で提供されている日本語プログラムでは、SDSUの学生のレディネスを把握し、ニーズを満たすための「配慮」はされるが、彼ら中心のプログラムを提供できる余力はない。それは、SDSUから受け入れる学生が確保できたとしても、受け入れられる枠は3名を上限としていることが大きな要因である。基本的にSDSUからの交換留学生は、来日する後期(10月から翌年2月)は、国際教育・研究センターが提供する日本語中級レベルの日本語プログラムの授業を受講する。このプログラムは、日本語能力試験2級相当レベルの予備教育生や交換留学生のために提供されている。そして前期(4月から8月)には、教養教育カリキュラムにある「日本語・日本事情」の枠で提供されている授業の他、専門に関わる授業や興味がある授業を選択して受講することになっている。実際

のところ SDSU から受け入れる交換留学生は、必ずしも日本語能力 2 級レベルに達しているわけではなく、国際教育・研究センターが提供しているプログラムに受け入れを認められたとしても、学習についていけないことがある。しかしながら、交換留学期間中は半期に最低12単位を取得することが「正規の学生」として認定される条件となっているため、日本語能力が 2 級レベルに満たない学生の受け入れを想定し、2009年度から群馬大学教育学部では、SDSU からの交換留学生のニーズと日本語レベルに合わせた内容の授業（前期・後期合わせて 8 単位相当）を提供することになった。とはいえ、教育学部が提供する授業も手探りの状態であり、受講生のニーズを満たし、国際教育・研究センターで提供されている「日本語・日本事情」を学ぶための橋渡しとなっているとは言い難い。学生のニーズを満たすことを考慮するならば、SDSU で日本語を学んでいる学生はどのような学生なのかといった実態を少しでも掌握しておくことは有益である。そこで、SDSU で日本語を学ぶ学生の実際の状況について理解を深めるために、群馬大学と SDSU とで共同調査を実施することにした。

## 2. 日本語学習者の理解に向けて

アメリカの大学で学ぶ日本語学習者を理解するにあたり、どのような情報が必要となるだろうか。

まず、日本語学習者の第一言語や言語学習歴を把握する必要があるだろう。特に言語学習歴を把握することは、学習者の言語学習に対するレディネスや興味・関心の高さについて理解するための一助となる。

また、第二言語学習者を理解するためには、なぜ日本語を学んでいるのかを知るための学習の‘motivation’が重要な情報となる。この‘motivation’の訳語については、「動機づけ」、「動機」、「モチベーション」と多様であり、用語をめぐる見解の一致は難しいようである（守谷 2002）。そこで本稿では、日本語学習者が現在自身の日本語学習の‘motivation’として認識しているものを「動機」として表記することにする。

第二言語学習の動機については、Gardner, R. and W. Lambert (1972) が社会心理学的観点から、「統合的動機 (integrative motive)」と「道具的動機 (instrumental motive)」とに分けて捉えた研究が広く知られている。統合的動機は、目標言語に対して肯定的な態度と感情を持っていることが学習動機であり、道具的動機は、よりよい仕事を得るため、より高い収入を得るため、といった学習言語の使用によって何かが得られるということが学習動機であるとした。さらに言語学習に関わらず注目されている学習動機として、自分自身のため、自己実現のために学ぶという内発的動機 (intrinsic motivation) と外から得られる刺激によって得られる、成果による評価や報酬による外発的動機 (extrinsic motivation) が挙げられる (Deci 1975、守谷 2002)。縫部等 (1995) は日本語学習の動機を研究するための枠組みとして、内発的動機と外発的動機とに大別し、それぞれの動機についてさらに下位分類を行っている。以下に、縫部他 (1995 p.163) が分類した日本語学習の動機について例を示しながら、まとめる。〈 〉の中のアルファベットは、本調査で提示した項目を示している（資料参

照)。mとtはここで分類されていないが、mは「特に理由はない」、tは「その他」として選択項目に挙げられている。

#### A. 外発的動機

A 1. 道具的動機 (何かの手段として日本語を学ぶ) < e, f, h, i, j, k, o >

A 2. 統合的動機 (日本人の友人を作りたい) < l, p >

A 3. 誘発的動機 (いい成績を取りたい、周囲の人に勧められて勉強を始めた)  
< g, n >

#### B. 内発的動機

B 1. 好奇心や関心 (日本語や日本文化そのものに興味がある)

< a, b, c, q, s >

B 2. モデルとの同一視 (日本語教師に憧れ、その先生のように日本語が話したい)

< d >

B 3. 仲間との相互作用 (日本語を使って日本人とコミュニケーションを行いたい)

< r >

縫部他 (1995) の研究はニュージーランドの大学で日本語を学ぶ学生が調査対象者であることから、縫部他の動機の枠組みを調査の参考にした。しかしながら、本調査は日本語学習の動機を中心に行うわけではなく、あくまで SDSU で学ぶ日本語学習者の実際を把握し、群馬大学のプログラムを再考するための情報収集として行ったものである。従って、交換留学受け入れ側が、基本的な情報として把握しておきたい事項を押さえるだけに留めたい。

### 3. SDSU の日本語プログラム受講生へのアンケート調査の目的と概要

2011年2月末から3月2日にかけて SDSU でアンケート調査を実施した。本節では、実施したアンケート調査の目的、対象者、そして調査方法について説明する。

#### 3.1 アンケート調査の目的と対象者

本調査の目的は、SDSU で日本語を学ぶ大学生の日本語学習者について理解を深めることである。日本語学習者を理解するために、まず、学習者の言語的背景を理解するために、第一言語、他の使用言語を調べ、次に日本語学習の動機について問うた。さらに、アメリカで日本語を学びながら彼らが「交換留学生として日本に来た際にしたいこと」は何かを調べた。これは、日本語学習の動機づけの把握にも関連し、また受け入れ後の対応について再考するための情報にもなると考えたために問うたものである。

### 3.2 対象者

SDSU で2011年春学期に開講された日本語関係の授業を受講している、日本112（日本語クラス初級II）61名、日本212（日本語クラス中級II）33名、日本312（日本語クラス3年II）16名、日本412（日本語クラス4年II）12名、日本422（新聞読解・上級作文クラス）9名の、合計131名を対象に調査を行った。その性別内訳は、男性が75名、女性が55名、不明1名であった。調査対象者131名の中で、国籍をアメリカとする者は44名、明記されていない者は18名、その他の国籍を持つ者は69名であった。

### 3.3 調査方法

調査方法としてアンケート調査を実施した。アンケート調査は、SDSU の日本語教育関係者の協力を得て、2011年2月下旬から3月2日にかけて実施された。使用したアンケート用紙については稿末の資料を参考にされたい。

まず、調査対象者の言語学習に関わる基本的な情報を得るために、第一言語、第二言語学習歴として設定した。

次に、質問1として日本語学習の動機に関する20項目を設定した。項目を決める上で留意したことを以下に述べたい。その際に、2節で取り上げた縫部他（1995）の日本学習の動機の分類でどれに該当するかは、A1（道具的動機）、A2（統合的動機）、A3（誘発的動機）、B1（好奇心、関心）、B2（モデルとの同一視）、B3（仲間との相互作用）の記号を用いて示すことにする。

第一に、SDSU から近年群馬大学で受け入れてきた学生は経営学部の学生が比較的多いこと、そして在籍中に日本で就職活動を行う学生もいることから、日本語学習の動機として、「就職に役立てたいと考えている」者が多いのではないかと想定される。そのために、アンケート調査の動機を尋ねる項目に「h. 日本の会社で働きたいから」、「j. 日本に関係する仕事に就きたいから」、「o. 将来仕事面で役立つから」というA1に分類される項目を設定した。

第二に、アメリカ合衆国にはヒスパニック系が多く、特に SDSU はメキシコに近いという地理的条件から SDSU にもスペイン語使用話者が多い。また世界的影響力の高さ、経済的発展や人口の多さなどを考えると、近年の中国語学習者の増加は疑問を挟む余地がない。そういった環境や条件の中、言語的にも文化的にも「マイノリティ」である日本語を学ぶということは、マイノリティな学習者になることに価値を見出しているのではないかと考えた。そこで、「f. 他の人が学んでいない言語を学びたいから」という項目を設定した。この項目も基本的には自己実現のための手段として日本語を学ぶことが主たる動機となるためA1に分類する。

第三に、日本のアニメが世界的に認知されており、人気があることも日本語学習の動機になっているのではないだろうか（熊野・廣利 2008）。そこで本調査では、「a. 日本の漫画が好きだから」（B1）という項目を取り入れた。

また、日本の大学では、教養教育の「必修」として「英語」の他に「第二外国語」として、何らかの語学（ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語など）を選択し、単位を取得することが卒業要件と

して求められることが多い。学生からよく耳にするのは、第二外国語の選択に際し、「興味・関心があるから」という以外に、「勉強したくないが、必修だから」、「なんとなく」、「単位が取りやすいと聞いたから」という表現である。しかしながら、アメリカの大学生にとって、「漢字」を読み書きに使用する日本語は親しみやすい言語というわけではないだろう。従って、「勉強したくない」「なんとなく」という学習態度で日本語を学んでいる学生は少ないであろうと仮定し、それを証明するために、敢えて「e. 日本語を学習する興味はないが、カリキュラムの一部だから」(A 1)と「m. 特に理由はない」という項目を加えた。

その他、日本文化に対する興味として「b. 日本の伝統文化に興味があるから」(B 1)、「c. 日本食が好きだから」(B 1)、「q. 日本の小説が好きだから」(B 1)を、日本人や日本に対する肯定的態度を示すものとして「p. 日本に住みたいから」(A 2)、「l. 日本人の友達を作りたい」(A 2)、「d. 日本人が好きである」(B 2)、「r. 日本人の友人と日本語でコミュニケーションしたいから」(B 3)を設定した。またA 3の誘発的動機を問う項目としては、「g. 家族が日本語を学ぶことを勧めたから」「n. 友人が日本語を学ぶことを勧めたから」を挙げた。

さらに、プログラム見直しの参考とするため、質問2「交換留学生として日本に来た際にしたいことは何か」を調べた。

まず、群馬だけではなく様々な地域に関して見聞を広めたいのではないかと考え、「a. 多くの場所を訪れたい」「o. 温泉に行ってみたい」「q. 他のアジアの国に行きたい」を、次に人的交流を深めたいのではないかと考え、「b. ホーム・ステイがしたい」「e. アジア人の友人を作りたい」「f. 多くの日本人と友達になりたい」「s. アメリカ合州国について日本人に教えたい」を設定した。また、文化的理解を深めるために「d. 多くの日本の映画を見たい」「m. 日本食を楽しみたい」「p. 日本の若者文化を楽しみたい」「u. 日本や日本文化についてもっと学びたい」という項目を挙げた。さらに、日本語学習について「c. 日本語を上達させたい」「h. 日本語能力検定試験に合格したい」「l. 自分の日本語力が通じるかどうかを知りたい」を、大学生として「i. 単位がたくさん欲しい」「j. アルバイトがしたい」「r. SDSU がいかにすばらしい大学であるかを伝えたい」、就職や将来に関わることとして「g. 仕事をみつけない」「k. 日本で大学院に進学したい」「t. 日本人に英語が教えたい」という項目を提示した。質問項目によっては意味合いが重複するものもあるが、その分類については今後の課題としたい。

#### 4. アンケート調査結果と考察

本節では、「第一言語」、「言語学習歴」、「日本語学習の動機」、「交換留学生として日本に来た際にしたいこと」に関してアンケート調査を通して得られた結果を報告する。

#### 4.1 第一言語

調査対象者の第一言語は表2の通りである。131名の対象者の7割強が英語を第一言語としており、次に多いのはスペイン語で約1割を占めている。また日本語を第一言語とする者が3名受講しているという結果が出た。

表2 SDSU 2011年春季学期 日本語受講生の第一言語

言語	人数
英語	97名
スペイン語	11名
中国語	5名
韓国語	5名
タガログ語	5名
日本語	3名
カンボジア語	1名
ベトナム語	1名
ロシア語	1名
無記入	2名
合計	131名

#### 4.2 言語学習状況

第二言語としてどのような言語を学習したことがあるかという問いに対する回答を表3に示す。

表3 SDSU 2011年春季学期 日本語受講生の言語学習状況

言語	人数	言語	人数
スペイン語	60名	ベトナム語	4名
英語	21名	アメリカ手話	4名
フランス語	21名	アラビア語	1名
タガログ語	11名	スウェーデン語	1名
中国語	10名	ハワイ語	1名
韓国語	7名	ポーランド語	1名
イタリア語	4名	ロシア語	1名
ドイツ語	4名	無記入	26名

集計から、8割の対象者が第一言語以外の言語学習歴を明記しており、そのほぼ3割が日本語以外に2つの言語学習歴があることがわかった。

また表3から興味深い結果が求められた。「ドイツ語」学習者の4名という数である。英語とドイツ語は両言語ともにインド・ヨーロッパ語族ゲルマン語派西ゲルマン語に属し、言語的に「近い」言語である。そのため、中学校や高等学校で学びやすい言語ではないかと考えるが、SDSUで日本語を学ぶ学生にはあまり学習されていないことがわかった。また、ドイツ語学習者とアメリカ手話の学習者の数が同数であることが興味深い。Furman, Goldberg and Lusin (2010)によると、アメリカの大学における外国語学習者総数の中で、アメリカ手話は、1990年秋現在の調査で0.1%で微少ではあるが、その存在が確認されている。1980年のデータには数が示されていないため、おそらく1980年代後半から正規の外国語としてクラスが提供され始めたのではないかと推測する。以降、アメリカ手話学習者の数は急激に増え始め、2002年で学習者数上位から第4位のイタリア語(4.6%)にほぼ並び4.4%を占める。2006年でイタリア語と同じ第4位(5%)となり、2009年には、第3位のドイツ語の5.7%に対し、第4位で5.5%とほぼ肩を並べている。この時、イタリア語は第5位で4.8%であった。従って、第二言語としてどのような言語を学習したことがあるかという問いに対して、ドイツ語とアメリカ手話の学習者が同数であったという結果は、アメリカの大学における外国語学習者の傾向を如実に表していると言える。

ただ、ここで留意しなければならないことは、表2で英語を第一言語としない対象者は「無記入」を除いて32名であったことである。英語が第一言語でないとしても、SDSUで学ぶためには高い英語能力を有することは不可欠である。表3では、21名が英語学習歴を示しただけである。他の11名は、英語は第一言語とは認識しないが、バイリンガル環境で育ったため、「学習」として英語を学んでいないという認識を持っている可能性が考えられるだろう。

#### 4.3 日本語学習の動機

次に、日本語学習の動機について分析していく。本調査項目では、報告者が提示した日本語を学ぶ動機に関する20項目から動機が強いものを3つ選び、強い順に「1」、「2」、「3」の番号を記入して回答することが求められている。ただし、アンケート用紙(稿末資料参照)では、調査対象者に最も「適した(suitable)」動機を選択するように指示が出されている。日本語学習の動機は、多様な要因が絡み合って成り立っているものと考え、ここでは調査対象者が回答しやすいように配慮し、「適した」という表現を使用した。

表4 日本語学習の動機

記号	日本語学習の動機	人数
b	日本の伝統文化に興味があるから。	15名
j	日本に関係する仕事に就きたいから。	13名
s	語学を学ぶことが一般的に好きだから。	13名
i	日本を旅行したいから。	11名
p	日本に住みたいから。	10名
a	日本の漫画が好きだから。	9名
d	日本人が好きだから。	8名
o	将来仕事面で役に立つから。	7名
r	日本人の友達と日本語でコミュニケーションしたいから。	6名
f	他の人が学んでいない言語を学びたいから。	5名

\* 調査対象者131名の内、有効回答数は124であった。

表4では、動機が一番強いとして選択された項目だけを集計し、上位10項目を提示する。尚、分析に関しては、表4の結果に基づいて行うが、場合によっては「2」「3」の記入があった回答も参考にすることとしたい。

一番強い動機として選択された項目は、「b. 日本の伝統文化に興味があるから」で、合計15名が回答していた。質問項目を設定した段階では、就職に関係する動機であるjとoが上位を占めると考えていた。確かにjは2番目に多く選択された動機となっており、13名の回答を得ている。oの将来仕事で役立つと考えている7名、そして表4にはないが、「h. 日本の企業で働きたいから」の3名と合わせると、結果的に日本語学習を就職や将来のキャリアに関わる道具として捉えている者は23名となり、実用性を求めた動機が強いということになる。しかしながら、前述した日本の伝統文化への興味が強いという結果は、見逃すことができない。SDSUで提供される日本語のプログラムを通して、日本文化に関する興味が高まるような授業が展開されていることがその要因の一つとなっているのではないだろうか。

また、「f. 他の人が学んでいない言語を学びたいから」という回答は5名に留まり、さほど強い動機となっていないことがわかった。ただ、「s. 語学を学ぶことが一般的に好きだから」は3番目に強い動機となっており、13名が回答している。従って、fとsを合わせて言語学習自体への動機を示す項目として捉えるならば、計18名の学生が、強い動機として挙げていることになる。

さらに、日本の漫画に対する興味・関心が高いのではないかと予想して項目を立てたが、6番目に多い9名が選択したのみという結果に留まった。全体的に見るとさほど特徴的な動機となっているわけではないようである。

本調査では、SDSUの日本語学習者の学習状況や動機は、日本の大学生の第二外国語学習の状況や

動機と異なるのではないかと予想を立てていた。結果として、その予想がはずれてはいないことがわかった。「e. 日本語を学習する興味はないが、カリキュラムの一部だから」という項目に動機として1番から3番を記入した者は誰もいなかったからである。しかしながら、「m. 特に理由はない」という回答をしたものが2名いた。さらに細かく見ると、その2名は両者とも台湾出身者であり、英文学専攻で、英語とスペイン語の学習歴があるという共通点があった。さらに両者共、3番目に強い動機づけとして「日本の漫画が好きだから」を選択していた。中国語を第一言語とし、英語とスペイン語を既に学習しているならば、確かに日本語を学ぶ差し迫った必要性は考えにくい。一般的に語学学習が好きだというわけでなければ、「なんとなく学習している。あえて言えば、日本の漫画が好きだから」という動機は理解できるだろう。

また興味深い結果として着目すべきは、「c. 日本食が好きだから」の項目の選択の仕方である。この項目を一番強い動機とした者はいなかったが、2番目としたものが6名、3番目としたものが6名もいたことである。日本人大学生が留学生に対して発する質問で「日本食は好きですか」という質問は必ずといってよいほど出される。それに対してほとんどの留学生は「好きです」と答える。本調査結果から、「日本食が好きである」ということが日本語学習の動機に少なからず関わる可能性があることがわかった。

本調査結果においては、「t. その他」の回答に関しても留意する必要がある。「その他」を一番目の動機として選択した者は11名であった。その中で3名が、祖父母や母親と日本語でコミュニケーションしたいとし、さらに2名が、妻が日本人であるため家庭の中のコミュニケーションで日本語を必要としていることがわかった。

#### 4.4 日本でしたいこと

日本語学習の動機に関連して、実際に「交換留学生として日本に来た場合にしてみたいこと」について尋ねた結果について分析する。本調査項目では、21の事項を挙げ、その中から3つ選び、してみたい気持ちが強い順に「1」、「2」、「3」の番号を記入して回答することが求められている。日本でしてみたいと一番目に選択されたもので上位5番目までを表5に示す。

表5 交換留学生として日本に来た際にしたいこと

記号	日本でしたいこと	人数
c	日本語能力を向上させたい。	53名
a	多くの場所を訪れたい。	20名
u	もっと日本語と日本文化について学びたい。	20名
b	ホーム・ステイがしたい。	7名
g	仕事を見つけない。	5名

表5を見ると、「c. 日本語能力を向上させたい」「u. もっと日本語と日本文化について学びたい」といった学習意欲が高い（73名）ことがわかる。また日本語学習の動機づけとして4名が「h. 日本の企業で働きたいから」としていたが、本質問でも5名が「g. 仕事を見つけない」としており、両質問事項の結果が関連づけられる。受け入れ側として考慮しなければならないこととして挙げられるのが、「b. ホーム・ステイがしたい」という項目である。群馬大学では留学生に対し、前橋市国際交流協会の協力を得て、「ホーム・ビジット」という日本人家庭の日帰り訪問をするための情報を提供している。そういったホーム・ビジットを通して、大学では経験できない異文化交流体験から学ぶことは多く、このホーム・ビジットは、留学生からはかなり満足度の高いものであるようだ。

## 5. おわりに

本調査を通して、SDSUで日本語を学ぶ学生の実際について部分的ではあるが、有益な情報が得られたのではないだろうか。調査の結果、SDSUで日本語を学ぶ学生の多くは、第二言語や外国語として複数の言語を学習した経験が豊富であることがわかった。また、日本語学習の動機については、将来の就職に活かすといった道具的動機と日本の文化を学びたい、語学を学びたいという好奇心・関心に関わる動機が強い学生が多いということが明らかになった。ただし、限られた時間や場面でしか日本語が使えない外国における（JFL: Japanese as a Foreign Language）学習者と、日本語の実用的価値が高く、日本語に晒される日本における（JSL: Japanese as a Second Language）学習者の動機は当然異なるであろう（李 2008）。守谷（2002 p.324）が指摘するように「日本語学習者が多様化している状況を考えると、今後も様々な地域で、様々な背景を持つ学習者を対象にした調査が進められることで、さまざまな角度から日本語学習動機の解明が進むものと思われる」。そこで本調査結果を基に、交換留学生の「日本語学習の動機」に焦点を当て、来日前と来日後、そして来日後から帰国前に至るまでの交換留学生の動機づけの変容について、質的な研究を行うことを今後の課題としたい。

また今後は本調査結果を参考にしながら、SDSUから受け入れる交換留学生のプログラムについても可能な範囲での見直しを行っていきたい。群馬大学の249名<sup>1)</sup>の留学生は大半が中国出身（101名）で、次にマレーシア出身（41名）、ベトナム（26名）、インドネシア（23名）である。既存する日本語カリキュラムは、アジア出身の学習者に、そして大学の授業を日本語で受けるためのアカデミック・ジャパニーズを学ぼうとする学習者にとっては、充実したものであろう。しかし、SDSUからの交換留学生にとってはどうだろうか。実際にSDSUの日本語プログラムで学んできた学生からは、SDSUでは日本語学習が楽しかったが、群馬大学では日本語学習が大変だ、日本語の勉強の仕方が異なるので戸惑う、という声を聞く。初級、中級、そして中上級へと日本語学習の難易度が上がってくるにつれて指導する側の教授法や教材の内容も変わってくる。そこで、これからSDSUで提供している日本語プログラムについて調査し、群馬大学で提供している日本語プログラムとの比較研究を行うことで、どのようなカリキュラムの接続が可能かを模索していきたい。SDSUと群馬大学の日本語プログラム

の比較研究を通して英語圏の学習者により適したカリキュラムを研究していくことは、英語を第一言語としている国や、非アジア圏の国との国際交流を推進するための戦略の一助になるのではないだろうか。

謝辞：本調査実施に関してご協力をいただいたサンディエゴ州立大学の日本語教育関係者の皆さまに感謝申し上げます。

#### 注

- 1) 群馬大学国際教育・研究センター、群馬大学留学生情報 (2011年9月1日現在)  
<http://cier.aramaki.gunma-u.ac.jp/page1/joho.html> (2012年1月10日参照)

#### 参考文献

- 熊野七絵・廣利正代 (2008) 『『アニメ・マンガ』調査研究 地域事情と日本語教材』『国際交流基金日本語教育紀要』4号, pp.55-69.
- 小林明子 (2008) 「日本語学習者のコミュニケーション意欲と学習動機の関連」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部, 第57号, pp.245-253.
- 縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩 (1995) 「大学生の日本語学習動機に関する国際調査—ニュージーランドの場合—」『日本語教育』, 86号, 162-172.
- 守谷智美 (2002) 「第二言語教育における動機づけの研究動向 —第二言語としての日本語の動機づけ研究を焦点として—」『言語文化と日本語教育』5月特集号, pp.314-329.
- 李受香 (2003) 「第2言語および外国語としての日本語学習者における動機づけの比較—韓国人日本語学習者を対象として—」『世界の日本語教育』, 国際交流基金, 13号, pp.75-92.
- Deci, E.L. (1975) *Intrinsic Motivation*. NY: Plenum Press. (安藤延男・石田梅男訳 1980『内発的動機づけ』誠心書房)
- Furman, N., Goldberg, D. and Lusin, N. (2010). Enrollments in Languages Other Than English in United States Institutions of Higher Education, Fall 2009. *The Modern Language Association of America*. Web publication, December 2010.
- Gardner, R.C. & Lambert, W.F. (1972). *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*. Rowley, mass: Newbury House.



2. What do you want to do when you come to Japan as an exchange student. Choose any of the best **three** answers followed, putting the numbers **1** for the most suitable one, and then **2** for the second, **3** for the third in the ( ).

- ( ) a. I want to visit many places.
- ( ) b. I want to stay with a Japanese family.
- ( ) c. I want to improve my Japanese.
- ( ) d. I want to watch many Japanese movies.
- ( ) e. I want to make many Asian friends.
- ( ) f. I want to make many Japanese friends.
- ( ) g. I want to find a job.
- ( ) h. I want to pass the Japanese language proficiency examination.
- ( ) i. I want to have many credits.
- ( ) j. I want to have a part-time job.
- ( ) k. I want to find a good graduate program in Japan.
- ( ) l. I want to see if my Japanese is good enough for communication.
- ( ) m. I want to enjoy Japanese food.
- ( ) n. I want to enjoy Japanese traditional culture.
- ( ) o. I want to experience *onsen*.
- ( ) p. I want to enjoy young people's culture.
- ( ) q. I want to travel to other Asian countries.
- ( ) r. I want to let people know how great SDSU is.
- ( ) s. I want to teach Japanese people about the U.S.A.
- ( ) t. I want to teach Japanese people English.
- ( ) u. I want to learn about Japan and Japanese culture more.
- ( ) v. other ( )

Thank you very much for your help.

## Understanding University Japanese Learners in the United States : A Questionnaire Survey Conducted at San Diego State University

WATANABE Takako and HIGURASHI Yoshiko

It has been about 40 years since San Diego State University and Gunma University started an exchange program. Gunma University, however, has been struggling to provide a more suitable exchange program for students from San Diego. One of the main reasons for this is that Gunma University has failed to obtain adequate information about American students. Therefore, this paper attempts to investigate how certain issues related to language directly influenced Japanese learning by the students of San Diego State University, using the results of a questionnaire survey. The survey contained four main questions: (1) what is the students' first language?, (2) What other language have they learned apart from Japanese?, (3) Why do they wish to learn Japanese?, (4) What do they wish to do when they visit Japan? The results show that the students have been learning more than one language other than their first language, and that Japanese is an additional language for them. Moreover, they appear to have curiosity and interest in the Japanese language and culture, and instrumental motive in studying Japanese.